

県研究主題

豊かに感じ取る力を高めることを重視し、生徒一人ひとりの資質や能力の育成を図る
学習指導と評価の工夫・改善

提案 1

提案者 溝口 俊太郎（県央地区）

<研究主題>

I C Tを用いて、立体を構想・表現・鑑賞し、感性を高めるための効果的な活用法及び指導法を探る

1 提案内容

(1) テーマ設定の理由

① 今日の課題から

少ない授業時数の中でよりわかりやすく、より効率的に学びの質を高める授業の工夫・改善を行っていくことが重要と考える。

② 研究の経緯から

校内研の研修内容から、I C Tを用い、話し合い活動をわかりやすく効率的に行うことや、参考作品の提示などの鑑賞活動の充実から、学びの質を高め、感性を高める工夫を実践した。大和市全体でタブレットなどの新しいI C T導入を機会に、それらを用いた授業の効果的な工夫・改善を行っていきたいと考えた。

③ 生徒の実態から

一年生の課題で制作した動物の立体表現の際、うまく立体感が表現せず、骨組みの制作でも動物の想像ができず、生徒が主体となって制作を進めることが困難だった。

また、アンケート調査を行い、「スケッチしたものや写真などの資料を見ながら、粘土などで立体作品をつくることは好きですか？」という質問に対し、半分以上の生徒が経験していない上に、苦手意識のある生徒も多いことが分かった。

このことから、立体を制作する際に、よりボリューム感をとらえやすくする工夫や分かりやすい制作過程の説明などの授業を改善すべき点が見えてきた。

(2) 研究仮説

授業における生徒のつまづきを把握し、I C T等を用い、適切な方法で指導の工夫、改善を行えば、生徒の感性は豊かになり、高まるだろう。

(3) 研究内容

① スケッチ（取材）：タブレットに自分で必要な資料を保存し、整理ができた。

タブレットの機能を利用し細かい部分の観察が可能になった。

② 骨組み：プロジェクターで動物の画像を投影し、チョークで体の中心や軸足の説明を行った。

③ 肉付け：パワーポイントでスライド資料を作成し、各タブレットに資料を保存して、授業中自分のタイミングでみることができるようにした。

④ 色付け：タブレットのペイントを使用し、色の選択や塗り方のシミュレーションを行い、自分のイメージ通りのものができるまで、何度もやり直しを可能にした。

⑤ 鑑賞：ラボノートで幅広いメッセージ交換と、一度に複数の意見を知ることを可能にした。

(4) 成果と課題

① 成果 「学びの質を高めること」

I C T等を用いたことで、題材のボリューム感、筋肉の付き方や模様、毛並の美しさなどのイメージを高めることができた。やり直しができる状況でシミュレーションができたことで、技法の指導や道具の選択、表現の工夫のイメージを高めることができた。

② 課題

I C Tを用いる際の説明や不具合への対応、事前準備が不十分であった。一部の生徒に対して、指導の工夫・改善も課題となった。

2 協議内容（質疑応答）

- ・ I C Tの導入は各地区・各学校の事情で異なることは仕方がないとして、40 台のタブレットを使う時の準備はどのように行ったか。

→前もって、40 台に必要なデータを入れたり、授業前にコードから外し運んだりするので、かなりの時間を要した。

- ・ I C Tを使うことで、生徒の表現や構想する力が高まり、効果的に使用できたか、また主題を生み出すきっかけになったか。

→動物の取材カードを作り、その動物を選んだ理由や好きなどころなど、調べた内容をまとめ、主題を決めさせた。また、以前 I C Tを使わない授業では、動物の形や色の表現を重視した授業展開だったのに対し、I C Tで動画を見られたことで、動物の生態系を知り、選んだ動物のイメージが広がり、生き生きとした表現が加わったと考える。

- ・ I C Tを利用した時の評価はどのように行ったか。

→全体で細かくタブレットの利用をチェックし評価したのではなく、ペイントのシミュレーションをどう生かして着色したかは評価した。タブレットで資料を活用してリアルに作ったり、制作手順の説明に使ったりするなど、あくまでもツールとしてどう授業に活かせるかが課題と考える。

3 まとめ

生徒達にどんな力を付けていくのか、何ができるようになるのかという点に大きな目的（ゴール地点）があると言える。知識・理解の高まりを I C T（タブレット）のみに頼って発想や構想を高められない授業形態だとすれば、生徒達から自然と表したい気持ちが生まれ出るだろうか。造形的な視点を大切に意識した指導の手立てを、どう工夫するかに十分気をつける必要がある。様々な良さや豊かさをより大切に、生徒の発達に寄り添い、感性を耕すことのできる教科であること。生徒の内面をどれだけ知ることができ、技能ではなく、共通事項を使って思考を高められるかに注力する必要がある。そこに、生徒の思いや願いを読み取る力を教員自身が実践していくという美術科としての特性がある。学習意欲に関連する指導事項 A 表現（1）「主題の生成」を絡めて課題を整理すると、まず第 1 に、中学生の発達の段階（思春期）であり、主題を見つけ、自分らしさを表現することは、生徒達にとって簡単なことではないということ。第 2 に、指導事項 A 表現（1）アでは「感じ取ったことや考えたことなどを基に主題を生み出すこと」とあり、主題を生み出すことが自分自身を表すことであり、他者と関わる中で自分に気づかされる題材であることが重要であること。第 3 に、生徒達の「やりたい！」という気持ちを引き出す題材選びは、生徒達が材料との出会いによる「感情・情感・感動など」が移入されることが大切であると考え。表現するまでの生徒達の思いを見取ることこそ、その子らしさを見いだすきっかけとなるだろう。

<研究主題>

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善のために、

- 図画工作科・美術科における「じっくり考え 高めあい 次につなげる確かな学び」
に取り組む子どもの姿を目指して —

1 提案内容

横浜市教育課程委員会 図画工作科・美術科専門部会では、新学習指導要領に基づく教育課の編成及びカリキュラム・マネジメントの方向性を示した「横浜市立学校カリキュラム・マネジメント要領総則（素案）」を策定した。そして、本年度はそれらを踏まえて、図画工作科・美術科において育成する資質・能力の分析及び、各学校の教育課程の編成に向けて授業実践を基に研究に取り組むこととした。

(1) 授業実践

「じっくり考え 高めあい 次につなげる確かな学び」について、小中合同で取り組んでいるワーキンググループからの共同報告が行われた。

① 授業実践1：小学校5年生 Step Up Together! 『一步先の自分』へ

今の自分を見つめ、ビニール袋に新聞紙をつめて、今の自分の形をつくり、そこにアルミ針金を巻いていき、なりたい自分のイメージへと変化させていく題材を設定した。線が立体になる面白さを感じ、抽象的な形で気持ちを表現する姿、友達と話したり、見たり、聞いたりしながら考え、互いに高めあう姿、今の自分をどんどん変化させる楽しさや線の美しさや面白さを感じながら、未来への自分にイメージを広げ、じっくり考えて表現を追求していく姿を目指した。

- ・ 導入で一本の針金を使って自分の人生を表したことが、次時の自分、さらに一步先の自分を表すことにつながった。身の回りの造形物や水引を鑑賞したことで、よさや美しさを共有でき、その後の表現活動につながった。また、作品を通して友達と話し合う言語活動は、どの教科の学習にもつながる力である。

② 授業実践2：中学1年生 緊急指令『厚紙タワー チャレンジ』

美術+技術のコラボレーション授業である。教科の枠を超え、学んできたことを総合的に生かす取り組みが生徒たちの中から自発的に起こるものと予想される。それにより、今までになかった新たな発想を生み出すことにつながると考えた。また、学んだことを生かすことを通して、自分ができるようになったことを実感できる題材である。話し合いながら共同で制作し、活動の途中で鑑賞の時間を設定し、自分のチームの振り返りと、他チームの取組との比較鑑賞によって、新たな気づきに触れ、発想を刺激しあいながら資質・能力をより働かせる生徒の姿を目指した。

- ・ 小・中学校で、材料や用具の扱いについて学んできたことにつながりによって、今回の作品が生み出された。→学びのつながり
- ・ 美術で学ぶデザイン性と技術で学び構構性がつながり、今回の作品が生み出された。→他教科とのつながり
- ・ 今までの学びで獲得してきた教科の知識や、コミュニケーション能力などの学びの蓄積が、生徒たちの未来につながっている。→社会へのつながり

③ 授業実践3：中学3年生 『家族を思う』

～家族とともに和めるステキなあかりをつくろう～

特別の教科「道徳」との連携授業である。修学旅行後、学年だよりで家族との関わりに視点をあてるきっかけをつくり、道徳の時間で家族について考える題材を取り上げ、さらに考えを深めた。そして、美術での「家族を思う」の授業を通し、思いや願いを造形的な感性を働かせながら制作した。

- ・ 今までの学びを生かし、ここまでの素材体験も反映されて、さらに周りの生徒の活動を見合ったり、アドバイスしあったりする中で、お互いに高めあうことができた。

2 協議内容

◎ 他教科とのコラボレーションについて

- ・ 川崎では、音楽+美術でのコラボレーション授業の実践報告があった。音楽を聴き→イメージを絵に表し→絵を見ながら再び音楽を鑑賞するというもの。
- ・ 美術+社会でパブリックアートに取り組むこともできるのではないか。
- ・ 美術で学ぶ内容は、他教科で学ぶ内容と重なっていることも多いので、他教科とのコラボレーションはしやすい教科である。

◎ 図画工作科と美術科のつながりについて

- ・ 相模原では、毎年「さがみ風っこ展」が開催され、地区ごとのブロックに分かれた合同評議会が、小中合同で行われている。その中で、小学校・中学校の教員がお互いの情報交換や実践報告、お互いの意見や要望の交換が行われ、非常に有効である。
- ・ 横須賀では、毎年児童生徒造形作品展が開催され、横須賀市立の幼・小・中・高が一堂に会して作品展を行い、それぞれの作品を見合う場となっているが、教員の交流場面は少ない状況である。
- ・ 国大附属中学校では、図画工作科と美術をつなげやすいのではないかとという質問に対し、附属中学校の教員より、中学校から進学してくる生徒がいる。やっていることが点のままで、なかなか線にはならず悩んでいるという回答があった。

3 まとめ

○ 助言者より

- ・ 横浜市では、現行の学習指導要領に合わせて作成した「横浜版学習指導要領」の中で、9年間の学びに合わせたベースカリキュラムや指導計画例を作成し、提示してきた。本年度は、新学習指導要領に基づく「横浜市立学校カリキュラム・マネジメント要領総則（素案）」を策定し、授業実践における研究に取り組んでいる。
- ・ 「じっくり考え 高めあい 次につなげる確かな学び」は、国が示した「主体的・対話的で深い学び」を子どもや保護者、地域にもイメージできる姿で、横浜が独自に示したものである。また、子ども一人ひとりが、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、資質・能力を身に付けていく姿であると言える。
- ・ 新学習指導要領に向けて、自校の3年間だけではなく、小学校と結び付けた9年間のカリキュラムとして考えていくことも大切である。そのためには、小中一緒の教育課程研究会をもつことも必要である。そして、他教科とのつながりを考えていくことが大切である。